BATTLE BALLER HARUKA

Ⅲ

氷の美少女

6-和解

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第三集
氷の美少女

第**6**章
和解

作・Ψ**(Eternity Flame)**

正友(まさとも)名作劇場

青春カンーゴ

脚本(きゃくほん)　MASATOMO

主　ドクター修二　正友

演　看護師(かんごし)アキラ　正友（一人二役）

患者(かんじゃ)Ａ　伍籐

患者Ｂ　武内

ナレーション（声＝正友）

（医師(いし)の修二と看護師のアキラは、医療界(いりょうかい)でも屈指(くっし)の腕利(うでき)き医療(いりょう)チームとして、名を知らぬ者は同業者にいない程であった。その伝説とまで尊敬(そんけい)される彼らの医療チーム、“チームメディカルNOBUTA”に、今日も急患(きゅうかん)が運ばれてきた。）

●アキラ　先生！！急患です！

●修二　患者の症状は？

●アキラ　体中がボロボロです。

●修二　じゃー診察(しんさつ)してみよう…どれどれ？これはヒドいな…。一体、誰にやられたんだろうな。ちょっと患者さーん！意識あります？誰にやられたんですか～？

●患者Ａ　うぐぅぅ…ファイナルファンタジーのクラ〇ドみたいな男前の青年にやられました。（セリフ吹替え＝正友）

●修二　…そうですか。ソレは気の毒ですね。ま、ドツかれた男がかなりの男前であったのが、せめてもの救いですねぇ。

●患者Ｂ　テメェ…フザけん…!!

患者Ｂ役にされていた武内。正友の一人芝居中に、意識(いしき)が少し回復した彼が、その芝居(しばい)をヤメろと口を挟(はさ)もうとしたのだが。正友は武内のボディーを診察する演技を即座(そくざ)で盛り込み、腹を何度も殴(なぐ)り倒して意識を失わせると、何事もなかったかのように芝居を続けた。

●修二　…こりゃダメだな。

●アキラ　先生！治らないですか？

●修二　これは高密度(こうみつど)の男前＆男気エキスを、クラウド似で強い男前の青年なる人物から叩き込まれた事による、外傷性(がいしょうせい)ショックだ。このままベッドから、もう一生起きれないかも知れんし、もし意識が戻り体の傷は治ったとしても、極度(きょくど)の男気に折られた心の傷から、PTSDが発症し、排泄物(はいせつぶつ)…つまりはウ〇コが軟便(なんべん)気味になり、やがて下痢(げり)が止まらなくなって(ビチ〇ソたれ流し状態)歩行障害(しょうがい)に陥(おちいる)るだろう。まだ若いのに可哀想(かわいそう)だな…
●アキラ　先生！何とかならないんですか？
●修二　…うーん。一つだけあるんだが…このオペの成功率は0．001％未満だ。
●アキラ　…例え限りなく可能性が低いとしても、少しでも可能性があるなら、彼らの為に頑張りましょう!!
●修二　しかし…これはタイヘンなオペだぞ！
●アキラ　オレと先生が組めば、不可能はないッス！やりましょう。オレ達の患者を治したいという情熱で、彼らに奇跡を起こしましょう!!
●修二　…アキラ。お前って奴ァなんて男気のある男なんだ。俺は感動したぞ！コイツらを完治(かんち)させたら、帰って祝杯(しゅくはい)を上げよう。その時はお前の男気に敬意(けいい)を表し、俺が三杯さきに酒を飲むとしよう。
●アキラ　…いえ、ボクの方こそ、優秀(ゆうしゅう)で男気のある先生に敬意(けいい)を表し、三杯先に祝杯を頂かせてもらいます。
●修二　よし、やるぞアキラ。
●アキラ　はい！先生！！
●修二　いいか！この症状(しょうじょう)の完治(かんち)を目指すには、クラウド似の男前の青年に叩き込まれた男前＆男気エキスを超える、男前＆男気エキスをコイツらに叩き込むショック療法(りょうほう)が必要だ！俺達の男気を燃やせ！！
●アキラ　はい！先生！！

●修二　俺達程の男前さと男気を兼(か)ね備(そろ)えた二人が力を合わせれば不可能はないッ！！いくぞっ！！
●アキラ　はいッ！！
●修二　世界の平和を守るため!!
●アキラ　患者の未来を救うため!!
●修二　チームNOBUTAは一丸(いちがん)となって、患者の施術(しじゅつ)から治療計画を全身(ぜんしん)全霊(ぜんれい)を捧げてプロデュース＆サポート致します!!
●アキラ　オレ達が組めば不可能はない!!
●修二　だって俺達、男前!!
●アキラ　男前が男気を持てば、奇跡が起きる!!
●修二　俺達が組めば、世界が変わる。
●アキラ　だってオレ達、男前!!
●修二　だってオレ達、男前!!(どちらも正友)
●修二＆アキラ　いくぞ!!ウルトラハンサムギャラクティカ＆ジェットマグナムOTOKOGIアタッーク！！
●患者Ａ　うべるぶわぁぁぁー…（声＝本人）
●患者Ｂ　ほげろぴぶぅぅぅー…（声＝本人）
●アキラ　…先生。彼らは遠いお空へ飛んでっちゃいました。
●修二　うん。…オペは失敗だったようだな。だが、彼らは大空へはばたき、お星様になったんだ。彼らの人生は、一瞬(いっしゅん)だが最後の最後で光り輝いた。まるで俺達に感謝(かんしゃ)しているかのように…。
●アキラ　あの光りを見てる時の先生の横顔、超カッコ良かったッスよ。
●修二　あぁ。お前もカッコ良かったぞ。
●アキラ　…先生！！
●修二　アキラ！！
（二人はお互いの健闘(けんとう)と男気を讃(たた)え合い、熱く握手(あくしゅ)を交わした。その姿は、神々しいほどに男前で男気に溢(あふ)れた物であった。彼らの…）
「おい！もういいだろ！」

自作自演の自我自讃(じがじさん)をする正友の芝居(しばい)。あと少しでフィナーレという所のナレーションを、待ってられないといった感じで秀樹(ひでき)が止めに入った。

「…なんだよ秀さん。せっかく感動のフィナーレまで、あと少しだったのに…。」

「…いつも思うんだが、もうちょっとまともに戦えないのか？なんかワケの分からんコトを言ってたようだが…。」

正友の妄想(もうそう)から始まった芝居は、もちろんの事、セットも何もある訳ではなく。はた目からは正友が一人、ブツブツ言いながら動き回っているようにしか見えない。なので、秀樹には彼がふざけているようにしか見えず、そう言ったのだが。

「仕方ねぇじゃん。コレがオレの本気モードなんだから…。ところで秀さんよォ、もう二匹はどうしたんだ？」

「お前が長々と一人芝居らしき物をやってる間にやっつけたさ。」

秀樹がそう言いながら指さした方向には、言葉どおり剣次と松志田が横たわっていた。

「速っえ～…。」

「お前が遊び過ぎなんだよ！」

「遊んでねぇモン…いやぁ～それにしても患者A(伍籐)と患者B(武内)。あの最後の苦しそうな声はなかなかいい芝居だったぞ。特に患者A。あれだけブン殴られたのに、最後の最後で嬉しそうにして、パッと見にはちょっと難解(なんかい)な態度に思われるかも知れないが、オレには分かったぞ！患者AはMっ気があるというアドリブを入れてたんだな。心憎(こころにく)い演出までして…敵じゃなかったら、いい芝居のパートナーになれたのにな…。」

それは芝居の演出ではなくて、性格が出ただけではないのかと思った秀樹であったが。正友の大きな声の一人言をツッ込む気などさらさら沸(わ)かず、はるかの事が気になったのでそちらに正友の意識(いしき)を向かせるのが先決(せんけつ)だと考えていた。

「おい、正友！」
「ん!?何さ？」
「何か余韻(よいん)に浸ってるようだが、はるかと詩音ちゃんの所に駆けつけなくていいのか？」
「あっ!?いっけね…。秀さん、オレ行ってくるわ。」
「あぁ。俺は他の皆が心配だから、そっちに加勢(かせい)に行く。後でおち会おう！」
一方。はるか達の闘いは、さらに激しさを増していた。
「フェンリル・インストール（氷獣血統覚醒）!!」
詩音がそう言うと、小さな体がはるかとほぼ同じくらいにまで成長し、それと共にパワーが格段に上がる手応えを、はるかは感じていた。
「凍(い)てよ！アイスニードル（氷結暗器）!!」
はるかから距離を取った詩音。すると彼女は、針のように細い氷の飛び道具を投げつけてきた。
「ファイアービュート(火焔鞭)!!」
はるかはスターダストフェニックスエクスプロージョン（不死鳥流星拳）で、それらを全て撃墜(げきつい)した。
だが、これで詩音の攻撃のネタが尽きた訳でもなく。一気に距離を詰めると、アイスフォルシオンで再び斬(き)りつけてきた。
（強いッ…!?）
アイスニードルとアイスフォルシオンとのコンビネーションからなる二段攻撃は、先程までの攻撃が霞(かす)んでしまう程に攻撃の組合わせの幅(はば)をぐんと広め、しかも、その威力(いりょく)が段々と増してきたので、はるかは心の中で焦(あせ)りを感じていた。

もはや、詩音に悠長(ゆうちょう)に語りかけるゆとりなど、すっかり消え失せてしまったはるか。詩音の苛烈(かれつ)な攻撃は、さすが人類とは一線を画する強大な力を持った血族(けつぞく)と自負(じふ)するだけはあった。

詩音の攻撃は、力と速さに物を言わせたシンプルな戦い方であったが。地味(じみ)ではあるがゆえに、やっかいこの上ない代物であった。そんな苦戦を強(し)いられてる様子のはるかを見て、翔(か)けつけた正友は―

「詩音ちゃん！止めろッ!!」

と、自分の内力(メキド)が尽きかけているのも忘れ、慌てて二人の間に割って入ろうとした。

「バカッ…くっ…!!」

無防備(むぼうび)な正友を言葉で止めようとしたはるかだが。詩音から放たれたアイスニードルを払いのけるのに必至(ひっし)で、言葉を詰(つ)まらせていた。一方、正友はもう少しで詩音の肩に手が届きそうな所まで来ていたのだが…

「ぐふッ!?…」

振り返った詩音は、正友の伸ばした手をつかみ取ると、有無(うむ)を言わせず腹に膝蹴(ひざげ)りを浴びせ、意識(いしき)を失わせた。

「コキアス（氷獣王）!!」

詩音がそう叫ぶと、空から詩音のケルビムが現れた。それは数日前に見たスノーウルフらしき面影(おもかげ)を残していたが、その体格は格段に力強い物に進化しているようであった。

詩音はコキアスに向かって、正友を突き飛ばすと、コキアスは正友を尻尾(しっぽ)で羽交(はが)い絞(じ)めにして虜(とりこ)にした。

「正友ッ!!」

「うぐぐぐぅぅ…離せ…。」

正友は必至に抵抗(ていこう)したが、内力が落ちている上に詩音の攻撃まで受けたせいでどうにも出来ない。ほどなくして、正友は完全に意識を失ってしまっていた。

再びはるかの方を振り向いた詩音。アイスニードルを放ったのだが、はるかは少しうつむいたまま何のアクションもしなかった。だが、そんな光景を見ても詩音は攻撃の手を緩(ゆる)める事はなく、暗器(あんき)を投げ終えると、すぐさま短刀(たんとう)を手に自分自身ごとはるかへと近づいていった。しかし―

「…!?」

驚(おどろ)く詩音。彼女は急に足を止めていた。足を止めたというよりも、気迫(きはく)と共に漲(みなぎ)る、はるかの激しいオーラに進もうにも足がすくんだようになっていたのが実情であった。

「…放しなさい。」

うつむきながら、はるかが沈んだ声でそう言った。

「くッ…何を放すの？」

「決まってるでしょ…正友を放して。」

そう言って、詩音を見返したはるかの瞳は怒りに満ち溢(あふ)れていた。その気迫(きはく)に気圧(けお)され、冷静だった詩音が動揺(どうよう)し、口数が多くなり始めた。

「あの男は大事な人質(ひとじち)。放して欲しければ私を倒しなさいッ!!」

そう言いながら、短刀を再びはるかに向けた詩音だが。

「えっ…!?」

知らぬ間にはるかに背後を取られ、頭の中が真っ白になっていた。何が起こったか事態(じたい)が呑(の)み込めないでいる内に、詩音は振り向きざまに腹部(ふくぶ)に強烈(きょうれつ)な蹴(け)りを浴びせられていた。

「くッ…ドコにこんな力が…!?」

堅(かた)い内力の障壁(しょうへき)に覆(おお)われている為(ため)。致命傷(ちめいしょう)には致(いた)らなかったが、かなり辛そうな詩音。まだ彼女は事態が理解できてないような口ぶりであった。

しかし、はるかがどうやったかは分からないが、自分が攻撃を受けたのは否定しようのない事実であり、ひとまず退避(たいひ)しようと氷の平原へ向かったのだが…

「ドコへ行くの？」
降り立った先には、はるかが既(すで)に回り込んでいた。唖然(あぜん)とする詩音に、勝負は見えたと言った調子で―
「もういいでしょ？正友を放して！」
と、はるかが言うと。詩音は激昂(げっこう)するかと思いきや笑い出した。
「何が可笑(おか)しいの？」
「まだ勝ったつもりになるのは早過ぎるんじゃない？」
「どういう事？」
「フェンリル・インストールの最終形態(さいしゅうけいたい)に、私はまだ達していないというコトよ！」
そう言うと、詩音の左半身がみるみる内におぞましい妖魔(ようま)の姿となり、凄まじい威圧感(いあつかん)を漂(ただよ)わせると、猛然(もうぜん)と襲いかかって来た。その威圧感はただの見せかけの物ではなく、それに相応(ふさわ)しい力を兼ね備えていて、両者の力はほぼ互角(ごかく)であった。
相殺(そうさい)しきれないお互いの攻撃。ダメージも両者とも拮抗(きっこう)していた。激しくぶつかり合い、お互い相手の攻撃を喰らい吹き飛ばされると、共にすぐに立ち上がろうとしたが、ダメージが足にきてしまい、睨(にら)みあう詩音とはるか。
「…あなたは、どうしてわたしを殺したいの…？」
先にそう口火(くちび)を切ったはるか。ソロモン王の秘宝(ひほう)が欲しい訳でもないのに、自分を狙う詩音が、一体誰に操(あやつ)られているのか真相を確かめたかったのであった。
「わらわはこの子(詩音)の祖母。我らが世界の覇権(はけん)を握るのに、お前が邪魔(じゃま)だから消すのよッ…。」
詩音の発する言葉が古めかしい語尾(ごび)となり、彼女を人形のように操っていた人物らしき肖像(しょうぞう)が、その言葉尻から推(お)し測(はか)れた。
詩音がダメージを負ったからだろうか、どうやらコントロールが上手くいってないような感じを、はるかは受けとっていた。

「そんな理由で…。」
そう言うはるかに、詩音の操り主は、ひどく憤慨(ふんがい)した様子であった。
「お前に何が分かるッ!!お前らの先祖にわらわがどんな仕打ちを受けたコトか…。今からその恨み晴らしてくれよう!!」
「待って…!?…」
歴史問題を孕(はら)んだ詩音の祖母の言葉。それは恨み骨髄(こつずい)と言った感じであったが、はるかにはその恨みが何なのかとんと解らず、とにかく相手が口をきいてくれたので、話しあいの場を設けたかったのだが。
足が動くまでに体力が回復した途端(とたん)に、詩音の祖母は詩音を操(あやつ)り、はるかに襲いかからせてきた。戸惑(とまど)ってしまったはるかは防御(ぼうぎょ)が間に合わず、詩音の攻撃を受け吹き飛ばされてしまった。
「出(い)でよッ！！ヴァルザード（氷帝長刀）!!」
詩音がそう言うと、彼女の両手に長刀(なぎなた)が現れた。氷柱(つらら)のような蒼白(あおじろ)い刃先、背中にはフェンリルのオーラを背負い、詩音の頭上には激しい冷気がオーロラのような色彩(しきさい)を生みだし駐留(ちゅうりゅう)していた。
「メテオカリバー!!」
はるかも後れて、スピリットアームズの最終形態である火聖剣(かせいけん)を召換(しょうかん)し、背にまとう不死鳥(ふしちょう)のオーラが猛々(たけだけ)しい咆哮(ほうこう)とともに燃えると、薄暗い空が朝日に染まる茜空(あかねぞら)のような眩(まぶ)しいばかりの朱色(あけいろ)になっていた。
その二つのオーラがぶつかる境界(きょうかい)線上(せんじょう)は凄まじい嵐が起き、これから起こる激闘(げきとう)を象徴(しょうちょう)しているかのようであった。
「凍(い)てよッ！！エオスストーム（超光磁気嵐弾）!!」
詩音の長刀(なぎなた)の一振りで、白色と赤緑色のオーロラが雷(かみなり)のように変形し。詩音の頭上からはるかの元へ無数に飛んでいった。

「メテオドライブ（煌流星炎破）!!」
はるかもズレータのバッティングフォームのような姿勢(しせい)から、袈裟斬(けさぎ)りに剣を返し、詩音に向かって振りかざすと、燃えさかる隕石群(いんせきぐん)がオーロラを迎撃(げいげき)して相殺(そうさい)した。激しい怒号(どごう)と戦火が渦巻(うずま)く中、互いの矛(ほこ)を交えるはるかと詩音。
その空を引き裂(さ)く激(はげ)しさが激しい気流となって辺り一帯の大気までをも巻き込み、離れたところで気を失っていた正友をも目覚めさせていた。
「ヤメろッ！二人共!!」
激しく合い争う二人を目の当りにした正友が、二人に向かって大声でそう叫んだ。その声に思わず耳を傾(かたむ)けてしまったはるか。その隙(すき)を詩音に容赦(ようしゃ)なく突かれ、肘(ひじ)打(う)ちを受けてしまい、血を吐きながら吹き飛ばされてしまった。
「はるかッ!!…くそッ…こんなモノ…うおおぉぉーッ!!」
はるかの窮地(きゅうち)に正友は最後の力をふり絞(しぼ)り、コキアスの尾による呪縛(じゅばく)を振りほどいて、詩音の前に立ちはだかった。
「ドコにそんな力が…!?」
うろたえる詩音。
「もうヤメろッ！詩音ちゃん。目を覚ませ!!オレを忘れたのか？」
「うるさいッ!!」
動揺(どうよう)している詩音。お互いを庇(かば)いあう正友とはるかを前に、詩音を操(あやつ)っている詩音の祖母は良心の呵責(かしゃく)からなのか何なのかは分からないが困惑(こんわく)をしているようであった。
その様子からして詩音の祖母は、自分の孫を操(あやつ)るのに相当てこずっているように見受けられたが、その困惑(こんわく)を否定するかのように正友の呼びかけを一喝(いっかつ)すると、彼を内力で叩きのめした。
「や…ヤメろ…」
「どうしてわらわの内力を生身で受けて立てるのじゃ…!?」

とうに体力の限界を超えながらも、はるかを庇(かば)おうとする正友に詩音の祖母が戸惑(とまど)い、ついに詩音を制御(せいぎょ)しきれなくなっていた。情にほだされたのではなく、体力の限界を超えてもはるかを護(まも)ろうとする、正友の気迫に押された感がいなめない。

詩音の自我(じが)が目覚めたのは詩音の祖母の心に隙(すき)が出来たのか、正友の声によってか定かではないが、詩音の祖母が正友を黙(だま)らせようと攻撃しようとすると激しい頭痛が起こり、あからさまな拒絶反応(きょぜつはんのう)を示した。そして、コントロールを失ってしまった詩音の体は、ついに大地にうなだれてしまっていた。

（お姉ちゃん！聞こえる？…）

その時。吹き飛ばされて倒れているはるかの心に、詩音本人の声が響(ひび)いてきた。「えっ!?」と思ったはるか。そのリアクションが詩音に届いたのか、詩音がはるかの心にメッセージを伝えてきた。

(私は、今、操(あやつ)られていて、私にはどうにも出来ないの。でも、私を操ってるお婆ちゃんの内力を壊(こわ)せば、それで私は助かるわ。だから、思いっきり戦って私を操る力を壊して…）

（詩音ちゃん!!…）

詩音の声はそこで途絶(とだ)えた。

内容を理解したはるかは、自分と正友の二人の窮地(きゅうち)を察(さっ)した詩音が、必至に祖母の思念(しねん)を払いのけ、勝つ方法を伝授(でんじゅ)してくれたとのだと悟(さと)り。満身創痍(まんしんそうい)であったが、何とかせねばという思いにかられて必死になって立ち上がった。

だが、一足先に元に戻った詩音が、立ったまま意識を失いかけている正友に、殺す勢いでヴァルザードの刃を向け斬りかかっていた。間一髪(かんいっぱつ)の所で駆(か)けつけた秀樹が、寸前で正友を救出したので事無きを得た。

「お兄ちゃん!!」

「はるか、詩音ちゃんのコトは任せて大丈夫か？」

「うん。」

「分かった。俺はコイツ(正友)を治療するから、それまで頑張れ！」

そう言って秀樹は正友を抱えると、はるかと詩音のもとから遠ざかった。

「一緒に戦わなくていいの？」
詩音の問いかけに―
「…そんな無理して現代言葉を使わなくてもいいわよ。」
と、はるかは答えた。
「何ですって～？」
焦った様子の詩音の祖母の口ぶり。はるかは全てを見抜いたのであった。さも詩音の自我(じが)が残っていて話しをしているかのように演じながら、はるか達の動揺(どうよう)を誘(さそ)い勝負を有利にするという戦術を。
「詩音ちゃんが、わたしにあなたの事を全部教えてくれたわ！」
「…そうか。だが、知った所で何になる！今のお主の状態でわらわに勝てると思っておるのか？」
「わたしは負けない…いえ、負けられないわッ。あなたを倒し、皆を守るッ!!」
「フフフ…そうか。ならば決着(けっちゃく)をつけるとしようではないか…。」
詩音の頭上の空に広がっていたオーロラが、彼女の手許(てもと)に集約(しゅうやく)されバトルボールとなった。はるかも自分の内力(メキド)を燃やし、臨戦体制(りんせんたいせい)を整えた。
詩音の姿を目にすると、攻撃をためらう気持ちも沸(わ)いたが、はるかの体力もギリギリであったため。さっき聞いた“心の声”を信じて、迷いを捨て詩音を倒す事に集中する以外に選択肢(せんたくし)はなかった。
「ヴァルハラダイヤモンドヘイル（天上極光雹零弾）!!」
「スーパーライジングエンパイアフェニックスショット(不死鳥飛翔皇炎弾)!!」
二つの巨大なバトルボール（神気殊玉）は激しくぶつかり合い、爆音を立てて消滅(しょうめつ)した。続けざまに次のボールを投げようとする詩音。はるかも対抗しようとして、ボールを生み出そうとした。
「天界を護(まも)る浄炎(じょうえん)よ…」
はるかが予備動作となる言葉を詠唱(えいしょう)しようとした時。
「フッ…また同じ技を繰り出す気？」
と、詩音があざ笑うかのようにそう言った。「はっ」としたはるか。
詩音がさっきとは違うボールを出そうとしていた事に気付いたが、時すでに遅かった。

「氷獣も畏怖(いふ)せし太極の氷雪(ひょうせつ)よ！永久(とこしえ)の凍気(とうき)もて汝(な)が敵を打ち砕(くだ)けッ!!」

そう言った詩音のバトルボールは、先程の物より明らかに力を増しているのが見て取れ、はるかは内心恐れたが。現在の自分には、今、繰り出す技が最高の物だったので、その技を出す以外にないと決意して放ったのだが…

「フェンリルブリザードクラッシュロストインフェルノ[超即吸熱凍傷破砕氷獣爪破]!!」

バレーボール大のダイヤモンドの塊(かたまり)のような巨大な氷が、赤緑と白色のオーラをまといながら、はるかに迫ってきた。二人の中間の間合いで、互いに投げあったボールが再びぶつかり合ったが、はるかの技は駆逐(くちく)され。詩音の技がはるかに直撃してしまった。

「きゃああぁぁぁー…!!」

激しい凍傷(とうしょう)の傷みに悲鳴(ひめい)をあげるはるか。しかし、その声ごと、一瞬にして体中が凍りつかされてしまった。冷気の勢いは凄まじく、はるかを凍らせるのみに止まらず彼女の周りをも凍りつかせ、ひとつの巨大な岩のようになった。

「勝った…フフフ。」

そう言って冷ややかに笑う詩音。技の名の通り、はるかは凍りつき、後は体ごと砕(くだ)け散らせるだけだとタカを括(くく)っていた詩音だったのだが―

「何ッ…!?」

はるかを凍結(とうけつ)させた氷が割れるには割れたのだが、驚(おどろ)く詩音。それは、まだ自分がトドメの行動に入っていないのに岩石状(がんせきじょう)の氷の表面に亀裂(きれつ)が生じたからであった。亀裂(きれつ)から水が吹き出すと、水晶(すいしょう)の塊(かたまり)のようにはるかを包み込んだ氷だけが瓦解(がかい)し、氷漬けから解放されたはるかが出てきてその場に倒れこんだ。

「誰だ!?!わらわの邪魔(じゃま)をした者はッ!!」

「俺だ」 と言い、姿を現す秀樹。

「次に殺されたいのはお前か？」

「別に殺されるつもりはないがな。だが恐ろしい技だな。一瞬ではるかを凍傷になるまで凍らせて固めてしまい、その上、粉々に砕こうとするとはな…。」
「わらわの力を見たなら中途半端な抵抗を止めるがよい。そうすれば苦しまずに、殺してやろう。」
「…残念だが、今のお前に抵抗する力は俺にはない。」
「フフフ…命乞(いのちご)いは認めぬ。」
「そうじゃない。お前の相手は、はるかがするってコトだ。」
秀樹がそう言って、はるかの方を指さした。
「フッ…何を。もはやあの娘に、わらわと戦う力など残されておらぬ！」
「俺の内力で、あの子の凍傷は治した。よく見ろ！」
秀樹にそう言われ、詩音がはるかをよく見ると。透明に近かったので見逃していたが、はるかを覆っている水があり、それが彼女の傷を癒(いや)していた。
まもなくはるかは目覚め立ち上がったが、治療されている間、秀樹と詩音の話しを聞いていたようで、すぐに戦う姿勢を見せた。
「はるか。俺も正友も、もうほとんど力が残ってない。つまりはもう後がないってコトだ。次の一撃に全力を込めるんだ、頼んだぞ！」
「うん。ありがとう、お兄ちゃん。」
皆を守りたいという一途な気持ちが、はるかに新たな力を目覚めさせ与えていた。
「…往生際(おうじょうぎわ)の悪い者どもめ。二人まとめて、あの世へ行くがよいッ!!」
詩音はそう言って、はるかを凍らせた先程の奥義を繰り出す体勢に入った。

「灼き尽くす!!…出でよ三位神！天の不死鳥(フェニックス)！！地の不死鳥！！私の心(なか)の不死鳥！！」

はるかがそう言うと、天･地･人のそれぞれを象徴(しょうちょう)した色合いを異にする炎が生まれ、結び付くと順々にめぐって七色に光り輝く不死鳥(ふしちょう)が、オーラとなって現れた。

はるかの手には、その不死鳥と同様に七色をめぐらせ光り輝(かがや)くバトルボールが現れた。さっきとは逆に、今度は詩音の方が、はるかの唯(ただ)ならぬオーラに恐れをなしていたが。退くに退けぬと言った感じで、投球動作を進めざるを得ないでいるようであった。

「くッ…凍てよッフェンリルブリザードクラッシュロストインフェルノ[超即吸熱凍傷破砕氷獣爪破]！！」

「燃えろッ!!…スーパーウルトラアルティメットスピリチュアルレインボーフェニックスメテオブレイク[超絶究極不死鳥霊號七色神炎破]!!」

激しくうねりを上げながら、やがてぶつかった二つのボール。しばらく押し問答を繰り広げたが、最後には、はるかの技がその勝負を制し、詩音の元へと吸い込まれるように超高速で向かっていった。

「きゃああぁぁぁーーー…!!」

攻撃を受けた詩音を七色に燃えさかる炎が包み込み、悲鳴(ひめい)だけがそこから漏(も)れ聞こえた。やがてその悲鳴も途切れると、拡散(かくさん)し、消滅(しょうめつ)した炎。

燃え跡にはボロボロになって取り残された詩音がいて、消滅した炎の後を追うように意識を失い、その場に崩れ落ちた。倒れた詩音の体から、ドライアイスの煙(けむり)のような物が沸(わ)き出すと、詩音の祖母の姿が亡霊(ぼうれい)のように浮かび上がった。

「わらわがこのような小娘に負けるとは…。」

そう悔(くや)しがる詩音の祖母に秀樹は―

「お前は過ぎ去った昔の恨(うら)みに縛(しば)られ戦っていたが。この子は、今、生きてる皆を守ろうとして戦った。その“思い”の強さが、お前の力を上回ったんだ。」

と、答えた。心から敗北を感じた詩音の祖母は、何処かに消え去り、大荒れだった下界の空も晴れ渡り、平静を取り戻していった。

しかし、いつまでも安心はしていられなかった。死闘(しとう)を繰り広げ、勝利したはるかが、疲労(ひろう)の為、その場にヘタリこんでいると。

「はるか！まだ休むのは早いぞ！」

と、秀樹の声がした。そこで、はるかが意識を集中すると、何かが崩壊(ほうかい)する音が聞こえた。それは、自分達の立っているこの島が溶け出し崩壊しているのだと気付き。ケルビムを使って慌てて、脱出する羽目になった。秀樹の手当ての甲斐(かい)あって、動けるまでに回復した正友と三人で力を合わせ、ついさっきまで敵であった者達全員を助け出す事も欠かさず、こうして戦いは幕を閉じた。

帰還(きかん)の道中(どうちゅう)。剣次達が使役(しえき)していた旧人類(ビッグフッド)と猛獣(スノータイガー)の大半が消滅した。意識を取り戻した剣次に理由を聞くと、遺伝子操作で強引に復活させた彼らは技術的問題でそう長くは生命が持たないとの事であった。

それでも、モデルとなったオリジナルの者達が数頭生き残った。剣次は助けられた事に感謝し、自分の利益の為に詩音を利用しようとしたと正直に話しをした。旧人類を増やして詩音を担ぎ出し、武力によって世界を制圧する。そして巨万の富を得て、いい暮らしをしたかったのだと。その為に、何千年も前の遺恨(いこん)を引っ張り出し、ひっそり暮らしていた詩音の祖母にそれを大袈裟(おおげさ)に伝え。しかも、はるかや秀樹の先祖達を悪者に仕立て復讐(ふくしゅう)心(しん)を煽(あお)ったのだとも言った。

その遺恨がどういう物であったのか、本当の話しを伝えようと剣次が説明しようとすると、秀樹は―

「もうそれは話す必要はない。」と、剣次を止めた。

「何故？…」と、剣次が言うと。

「過去の恨みはもう俺達には関係ない。先祖は激しい戦いを繰り返したようだが、その子孫である俺達は、色々あったがこうして和解しあった。だから、今を生きてる俺達が友好と平和を訴(うった)え、打ち解け合っている関係を、新しい“歴史”として未来に伝えてけばいいんじゃないのか？」

と、簡潔(かんけつ)に述べた。その秀樹の意見に、「なるほど！」と声に出す者もいれば、心の中で頷(うなづ)く者もいたが、そこに会する全員がその言葉に納得(なっとく)し同意していた。

「御恩(ごおん)は来世で！」
剣次達四天王は、命を助けてくれたはるか達の行為に痛み入り、別れ際に最上級の感謝の言葉を残し、去っていった。秀樹は、ひとまず手当てをしてから、詩音を剣次達の元へ責任を持って送ると言ったのだが。
秀樹達に面倒を見てもらうのが、詩音の教育にとっても最善だと言い。その剣次の願いを秀樹は快諾(かいだく)した。剣次達はそれを聞いて喜んだが、それ以上に正友が喜んでいるのを見て。
「アイツ、なんであんなにハシャいでるのかしら？」
と、釈然(しゃくぜん)としていない様子のはるか。そんなはるかに、秀樹がこう答えた。
「アイツ(正友)は、子供好きだからな。チャラチャラしてるように見せてはいるが、本当は優しい奴なんだよ。偏(かたよ)った面ばかり見ていて、お前はあまりいい印象を受けてないようだが。アイツは面倒(めんどう)見(み)がよくて、いい男だ。」
「お兄ちゃん、褒(ほ)め過ぎじゃない？」
「そんな事ないさ。俺は人を過大にも過少にも評価しない。それよりも、はるか。お前は、さっき危ないトコを助けてもらったんだから礼を言っておきなさい。」
秀樹に言われ、はるかは正友が身を呈して自分の窮地(きゅうち)を救ってくれたのを思い出し。正友に礼を言ったのだが、正友は何で礼を言われたのか最初は理解できず、はるかが説明すると—
「なぁんだ。そんな事か…まぁ、お前が大ケガしなくて良かったよ。」
と、さわやかな笑顔を浮かべた。いつものヘラヘラした正友ではなく、違った一面を見たはるか。詩音が回復するのを待っていた正友は、いつになく真面目な態度であった。
あるいは、こういう性格が彼の本当の性格なのだろうか。だとしたら、自分はエラく正友を誤解(ごかい)していたのではないかと、はるかは思い、「ドキリ」としたのも束(つか)の間。
「おい、みんな！詩音ちゃんが目覚めたぞ!!」

そう言って喜ぶ正友。続いて全員が歓喜(かんき)の声を上げた。そのムードに、正友の事を見直していたはるかの思いは掻(か)き消されてしまい。詩音の方へ意識が向いていた。

「…！？正友お兄さん…。」

「良かった詩音ちゃん。もう大丈夫だな。」

「私、操られてて…。」

「うん、分かってる。でも、もう大丈夫だ。これからは、オレ達と一緒に暮らそうな。」

「ホント？」

「あぁ、もちろんホントさ。」

詩音の喜びようと言えばタイヘンな物であった。まだ重体だったので、ハシャいだりは出来ないでいたが。表情でその嬉しさの度合いが伝わってきた。はるかは、その光景をほほえましく見ていた。と同時に、詩音をそこまで嬉しい気分にさせたのは、正友の優しさだと思い、また一段と彼を尊敬(そんけい)していた。

「私が操られて気を失ってる時、正友お兄さんの声が聞こえてきたよ。」

「あぁ。あの時、詩音ちゃんが目覚めてくれて、操られてんのを止めてくれたからオレ達が勝てたんだ。よく頑張ったな！」

「ううん。私の方こそ、正友お兄さんに励(はげ)まされて勇気を出せたから…ありがとう。」

「そんな…照れるなぁ…これからは、オレ達は兄妹だから、何でも困った事があったら言ってくれよな！」

「うん、ありがとう。正友お兄…あの、お兄ちゃんって呼んでいい？」

「あぁ、もちろん。これからはオレを兄貴だと思って、何でも遠慮(えんりょ)なく言ってくれよな！詩音ちゃん！」

生死を賭(か)けた戦いの中で、正友と詩音の間には、深い信頼関係が生まれたようであった。そんな二人を見ていて、昔の自分と重なるなと思ったはるかが、

「お兄ちゃんも、わたしが小さな時に、あんな感じでいつも優しくしてくれたね。」

と、秀樹に語りかけた。

「あぁ。そうだな…俺も師匠には優しくしてもらったな。そうやって、目上の者は目下の者を育て、そうして今や、俺達は多くの仲間に恵まれ、そして、また新しい兄弟ができた。素晴らしい事だとは思わないか？」
「うん、そうだね。」
「愛情をもって人を育てれば、その種は、多くの“実り”を与えてくれるってコトだ。愛情は人を育てる。人が育てば、それがまた新たな人を生み育てる。さっきの闘いだってそうだ。」
「さっきの…？」
「あぁ。お前は、始めは詩音ちゃんを傷つけるのを恐れ、本気で闘えないでいた。そこを詩音ちゃんを操っている祖母につけ込まれ、お前は負けそうになった。だが、お前と詩音ちゃんを救おうとする、正友の決死の努力が解決の糸口をお前にもたらし、そして、皆を守りたいというお前自身の思いが、最後の最後で新たな力を生み出し、勝利をもたらした。正友もはるかにも個性があって、形は多少違っているが、それはどちらも愛情だ。詩音ちゃんに手が出せなくて、自分達が追い込まれたのも愛情のゆえだが。最後には、それが邪悪(じゃあく)なる力を打ち破ったんだ。愛情は時に、受け入れられなかったり、届かなかったり伝わらなかったりして、それはとても儚(はかな)く脆(もろ)くも見えるが。それが極限までゆけば、その愛情は全てを包み込んで必ず相手を救い出す。何よりも強く、たくましい力となるんだ。詩音ちゃんは、初めて俺達と会った時は、とても暗かった。きっと色々とヒドい目に会ったからだろう…。だが、今じゃあんなに明るく子供らしい笑顔を取り戻した。きっと、あの子はこれからの俺達の背中を見て、立派な大人になってゆく事だろう。詩音ちゃんの心に暗い影を落としていた過去。そして、そんな子供の心を弄(もてあそ)んでいた欲望に狂(くる)う大人の力。色んな負の要素が幼い詩音ちゃんを翻弄(ほんろう)し、暴走させていた。そんな歪(ゆが)んだ大人達の心に蝕(むしば)まれた心を、俺達の温かい愛情が溶かしたんだ。そして、お前の愛情は、自らの力の限界の壁さえも打ち破ったんだ。」

正友は自分を庇(かば)ってくれたが、秀樹はそんな正友を庇った。そんな事を思うと、はるかは自分が自分の力の限界を超えれたのは、自分だけの力だけではないと思ったが。そんな事を謙遜(けんそん)して、秀樹に伝えなくても、彼はそんな事は分かってるだろうと思い。ただ秀樹と共に、みんなで喜びに浸(ひた)っていた。

そんな幸せなムードの中。川辺でホタルを眺めていた秀樹の事が、はるかの頭にふとよぎった。あの時、秀樹が見せた寂しそうな瞳と、儚(はかな)く消えてしまいそうな後ろ姿。それは、大切な人に届かない愛情ゆえの姿だったのだと、はるかはここに来て確信した。秀樹に思いを寄せるはるかは、秀樹が想う相手に対して軽い嫉妬(しっと)をし辛くもあった。

だが、秀樹が一番辛いのだと思うと、自分の事情は押しのけられた。愛は形を変え、いつかその人を救う。はるかがこの闘いで得た経験であり、秀樹に教わった教訓であるが。その言葉の通りに、秀樹が思いを寄せる人に彼の気持ちが伝わって、元にもどって欲しいという気持ちでいっぱいになった。

第三集　完

～次集へ続く～

バトルボーラーはるか 第三集 氷の美少女
第6章・和解

http://p.booklog.jp/book/66799

著者：Ψ(Eternity Flame)英　樹(はなぶさ　いつき)
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile
ブログ：http://profile.ameba.jp/jjmmd123/

更新・編集：Ψ**(Eternity Flame)**　秋乃空(あきのそら)
ブログ：http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします
http://p.booklog.jp/book/66799

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/66799

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ